

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
かすがい まさお 春日井 正雄	男 性	1 5 歳	新城市宮ノ後

「新城防空監視哨に勤めて」

取材 2025. 3. 1

○ 14歳で防空監視哨へ

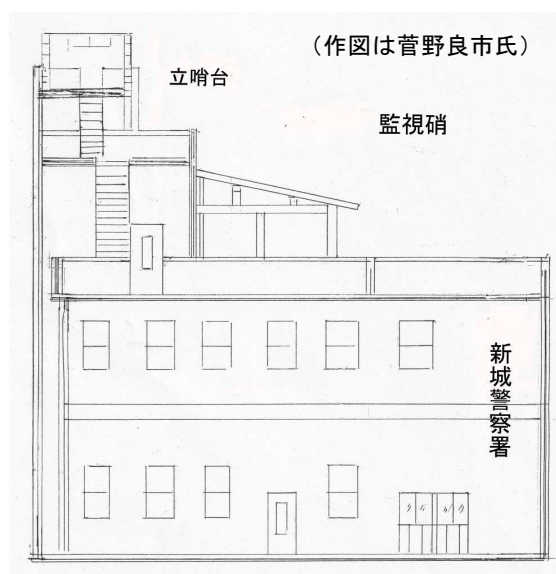
新城防空監視哨が置かれたのは昭和15年で、新城国防婦人会が見学と慰問に訪れ、町の話題になりました。終戦の昭和20年8月まで置かれていました。当時の私は、新城高等小学校修了後、昭和18年から3年続けて海軍を志願しました。親には内緒にしていました。合格していたはずなのに、なぜか採用通知は来ませんでした。恐らく自分は長男だったためだと思います。同級生で採用された桜淵の山本君は、神奈川県横須賀の海軍対潜学校で米軍の機銃掃射にやられて亡くなりました。自分も入隊していれば、同じ運命だったかもしれないと複雑な思いでした。まだ14歳だったですよ。

私は青年団に入っていたのですが、新城町で募集があった防空監視哨に勤務することになりました。特に試験はなく、結核や痔の病気がなく、健康で目や耳がよければよかったようです。私は飛行機が好きだったので、ちょうどよかったのかもしれませんが。私は、昭和18年4月から終戦の昭和20年8月まで2年あまり勤務しました。

防空監視哨とは、敵機をいち早く見つけ、指令本部へ知らせるのが役割です。早く知らせることで、防衛の戦闘準備や住民の避難や防護準備ができるのでとても重要です。現在の勤労青少年ホームの地に警察署があり、その屋上に監視哨が置かれました。

警察署は昭和9年の建築で、当時としては県下でも数少ない鉄筋コンクリート3階建てでした。当初は警察署内の階段を使って出入りしましたが、署内の出入りは支障があるため、昭和18年に海老から材料を運び、高い梯子が作製されました。できた当時は生木だったので揺れて怖かったですが、半年ほどで落ち着きました。屋上には腰の高さぐらいの木造の立哨台（見張り台）がありました。

新城防空監視哨の立面図

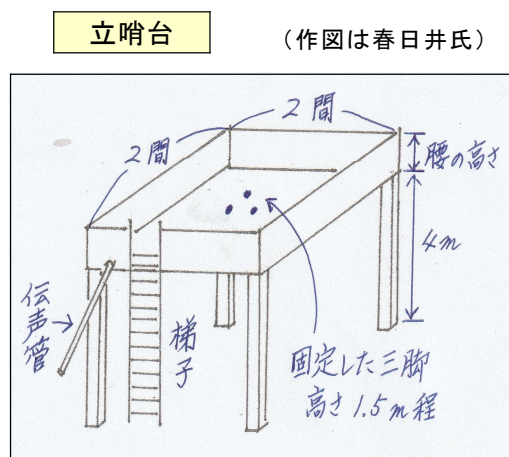
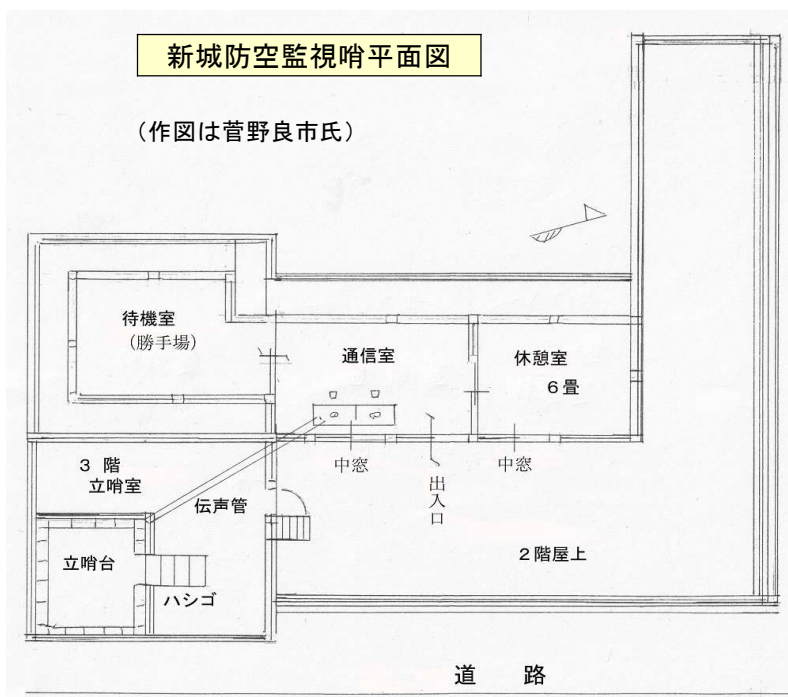


哨員は全体で18名、一つの班が6人ずつの3班編成でした。24時間勤務で3日に1日ずつ勤務して交代していました。大体は、地元の地域ごとに班が編成されていました。勤務開始は9時で、勤務中は外に出られなかったため食事は家族が持ってきてくれました。役割分担があり、監視2人、通信2人、待機2人となっていて、2時間で役割を交代するようになっていました。班員はみんな若くて、14歳から18歳ぐらいで青年学校の生徒もいました。班長は、班員とは別に在郷軍人が務めていました。

監視のために、軍から20倍の三脚付きの双眼鏡と7倍の双眼鏡が支給され、常に二人で監視していました。20倍の双眼鏡は本宮山にいる人の男女が区別できるほどでしたよ。

私は14歳で勤め始めましたが、給料が出て32円（13歳～15歳は同額）の手当が支給されました。その頃、小学校長や銀行の支店長が100円、新任教員が50円でしたから、とても優遇されていたと思いますね。

当時は、田原と新城、海老に監視哨があったと記憶しています。三河地区の防空監視隊本部は豊橋警察署内に置かれ、新城から警察電話で報告すると、本部員の女性交換手が受け、愛知県庁に置かれた名古屋監視隊本部へ連絡、その情報はまとめられて東海軍司令部内の防空庁舎情報室へ電話伝達されました。緊急の場合は速報装置があり、他の通信を遮断して連絡できるようになっていました。



【敵機を発見した場合の対応】

- ・ 敵機発見 方角、高度、機種、
↓ (伝声管) 機数、進行方向
- ・ 通信室 (復唱)
↓ 電話連絡 (警察電話)
- ・ 豊橋監視隊本部 (豊橋警察署)
↓ 電話連絡
- ・ 東海軍管区司令部 (名古屋)
↓ ↓ ↓
各方面へ情報伝達
陸海軍関係、戦闘準備、県市町村
(警戒警報、空襲警報、解除連絡)

敵機だけでなく日本の戦闘機^{せんとう き}も見極めなければなりませんので、日米すべての戦闘機^{しゆん じ}を頭に入れ、瞬時に連絡できるようにしました。3面図^{えが}といって、軍用機の正面、横など3方面からの機体の絵が描かれていました。それは持ち出し禁止でしたが、私はすべて覚え、機種名を言えるようにしていました。今でも言えると思いますよ。ただ、ゼロ戦^{れいしき かんじよう}だけは図面がなかったですね。当時は英語のゼロは使用しなかったので零式艦上戦闘機^{れいしき かんじよう}といい、豊橋に基地があったのでよく見かけました。

監視は、夜でも雨でも続けますので結構きつかったですね。敵機を発見すると、方角、高度、機種、機数、進行方向を伝声管で下の階の通信室へ連絡します。方位や高度は勘で分かるようになります。通信室は復唱し誤りがないように確認し、豊橋警察所の監視隊本部に連絡します。こういった報告は何回もしましたよ。

○ 防空監視哨で見たこと

あるとき、B 1 7爆撃機^{ばくげき}を発見しました。4発のエンジンを搭載した大型爆撃機^{とうさい}で、空の要塞と呼ばれていました。B 1 7が国内を飛ぶと新聞報道があったので見分けることができました。B 2 9はさらに改良された超長距離大型爆撃機^{ちようちようきょり}で、全長30mもあり、B 1 7の全長20mより二回りも大きく見えました。また、機体内に初めて与圧キャビン^{よ あつ}が設けられ、9000mの高度でも酸素マスクは不要でした。日本の戦闘機が太刀打ちできるはずありません。

ところが、昭和18年の暮れか19年始めに岡崎方面からB 2 9が火だるまになって水平きりもみしながら落ちていくのが見えました。私はその様子を20倍の双眼鏡で見えていました。パラシュートで脱出した兵士は見えなかったので、全員亡くなったと思います。そのことは翌日の新聞に掲載され、醜翼の残骸^{しゆうよく ざんがい}という見出しでした。(右の囲み欄参照)

昭和20年に入ってからの本土空襲^{くうしゆう ころ}の頃は、日本軍の戦闘機で立ち向かうことはできなくなっていました。豊橋空襲は私は見ませんでした。後で聞くと、花火を見るようできれいだったと話す人もいました。

豊川海軍工廠^{こうしやう}の爆撃は、よく覚えています。その日は勤務日ではなかったと思いますが、監視哨^{こう}に来ていました。この頃には、爆撃を知らせる予告のビラ

東海軍管区のB 2 9撃墜米軍機の記録

POW(戦争捕虜^{ほりよ})研究会HPより
1945年1月3日午後3時頃、愛知県東加茂郡松平村(現・豊田市坂上町)の山林にB 2 9が墜落。
小牧基地から発進した陸軍飛行第55戦隊の代田実中尉^{ちゆう い そうじゆう ひ えん}操縦の飛燕^{ひ えん}の体当たり攻撃^{こうげき}による。代田中尉はパラシュート降下したが、重傷を負い、翌日、名古屋海軍航空隊病院で死亡。B 2 9は機長はじめ11人が墜落死。村人が現場付近で火葬して埋葬したが、戦後、遺灰を岡崎市欠町の公共墓地に納めて墓標を建てた。

この墜落事件は多くの新聞の記事やニュース映画になり、墜落現場には地元の人によって当時の出来事を説明した標示板が立てられている。

が撒かれましたので、海軍工廠がやられることは予想されていました。それほど日本の防空体制は崩壊していたのですね。爆撃を終えたB29が、何十機も編隊を組んで新城の真上を低空で飛んでいきました。その時、警察署長が見ていて「このやろう〜！」と叫んでいました。海軍工廠がやられているのは、地響きと真っ黒な煙が立ち上っていたので、大変なことになっているのはすぐ分かりました。

その時に、日吉の山の中に500ポンド爆弾を1発落としていきました。何らかの原因で落ちなかった爆弾だったのでしょね。

アメリカの爆撃機には無抵抗でやられ放題でしたから、もっと早く終戦になっていればどれほど多くの人の命が救えたことかと思いますね。一億玉砕なんて、とんでもない考え方を教え込まれたものだと思いますね。戦争は、どんなことがあっても避けなければいけませんよ。

聞き手	菅沼信秋（八名郷土史会）	岩山欣司（市教委）
文 責	安形茂樹（八名郷土史会）	